



胸に刻もう
「カスリン・アイオン台風70年」
～風化させない歴史とつなげる未来～



胸に刻もう
「カスリン・アイオン台風70年」
～風化させない歴史とつなげる未来～

胸に刻もう

「カスリン・アイオン台風70年」

～風化させない歴史とつなげる未来～

国土交通省 東北地方整備局 岩手河川国道事務所

カスリン・アイオン台風70年 事業報告書

この報告書は(一社)東北地域づくり協会のみちのく国づくり支援事業の支援により作成しています。



胸に刻もう

カスリン・アイオン台風70年
～風化させない歴史とつなげる未来～

カスリン・アイオン台風70年 事業報告書

昭和22年のカスリン、昭和23年のアイオンと、相次いで来襲した台風により、北上川、特に一関市周辺では死者100名を超える壊滅的な被害を受けた。平成29年と平成30年は、それぞれの台風被害から70年目の節目にあたる。

かつて水害の常習地帯だった一関地区と平泉地区は、今や一関遊水地の堤防や周辺の治水施設を原風景と捉える世代が多くなっている。さらに、先人達が行ってきた洪水対策で災害が減少した事で、水害に対する意識が確実に薄れつつある。

だが一方では、短時間の集中豪雨や局所的な豪雨などにより、治水施設の機能をはるかに上回る洪水の発生頻度が高まっている。

そこで本事業では、これまでの水災害の教訓を振り返り、近年の気象状況を学ぶことで、今一度、防災について理解してもらおう様々な取組を行った。

これからの地域の未来のために。住民一人ひとりがしっかりと認識し、風化させず、胸に刻んでもらうために。

CONTENTS

カスリン台風の記録	2
今昔物語①	4
アイオン台風の記録	6
今昔物語②	8
洪水の歴史と治水対策	10
カスリン・アイオン台風70年事業	13
水防災フォーラム	14
その他事業	19

カスリン台風の記録

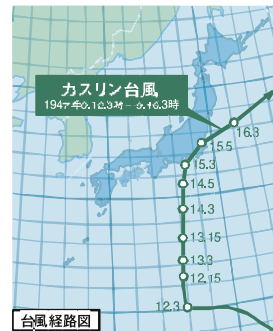


現・大町。水が引き、2階に達するほどの堆積物の山(一関市)

カスリン台風は、第二次世界大戦終結から2年後である昭和22年9月14日から16日にかけて日本を襲った。岩手県では同年7月と8月の2度の豪雨災害により堤防の決壊182箇所・破損114箇所の復興中で、さらに戦中に木々が伐採されていたこともあり、カスリン台風はかつてない大洪水となった。

気象状況

昭和22年9月12日に発生した台風は小笠原西方を北上。同時期、秋田沖に停滞した低気圧が県内に雨を断続的に降らせる。14日、台風が本土に近づくと、中部・関東地方の低気圧を吸収し温暖前線が強まる。この時、秋田沖の低気圧が岩手県を通過した事で大雨となる。その後、台風が三陸沖に抜ける16日午前2時30分まで岩手県内の豪雨が続いた。



カスリン台風による被害

被害項目		被害
人的被害		3,659人
内訳	死者	130人
	行方不明者	38人
	負傷者	3,491人
住家被害		42,161戸
内訳	全壊	613戸
	流失	455戸
	半壊	2,028戸
	床上浸水	21,348戸
	床下浸水	17,717戸
非住家被害		16,883棟
被害額計*		約54億円

*このデータは、北上川流域市町村の推定値です。

降雨状況

北上川上流部では奥羽山脈の東側斜面における降雨が多く、主に県南に多く降った。

比較的被害が少ない盛岡でも15日午前4時30分からの集中豪雨では、6時間で101mmを記録している。この日の降雨量は、岩手山で159.4mm、一関で155mmである。

12日から15日までの降雨量は、岩手山429.6mmを最高に、盛岡236.3mm、花巻296.3mm、巖手349.8mm、他地区もほぼ200mmを超えている。

この台風時における1日の最大降雨量は、宮城県の名取川支流北川の笹谷で14日に290mmを記録した。(※地名は雨量観測所の名称)

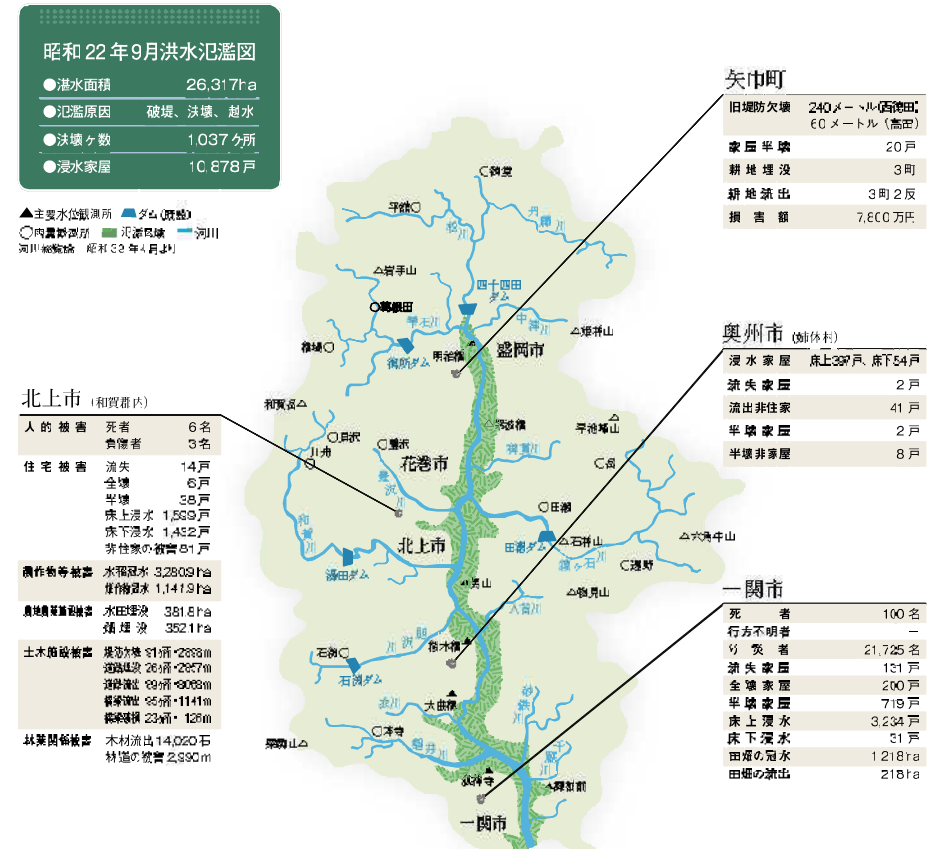
出水状況

豪雨は急激な出水となった。最も激しい水位上昇は一関市の狐禅寺で、13日13時に5m、15日13時に7.53m、16日13時に17.31m、同日17時に17.58mを記録し、それまで最高記録だった明治43年の14.62mを超える事になった。

この洪水により県内各地で浸水被害が発生し、県内の死者130名のうち一関は100名を数えるなど、最も被害の大きな地域となった。(※地名は雨量観測所の名称)



救助、移動に船が活躍する(川崎村)



昭和22年9月洪水氾濫図

- 湛水面積 26,317ha
- 氾濫原因 破壊、決壊、越水
- 決壊ヶ数 1,037ヶ所
- 浸水家屋 10,878戸

▲ 主要水源地 〇 ダム(既設)
 ○ 内農調整池 〇 河川
 河川総延長 総利 0.9年4月引

北上市 (和賀郡内)

人的被害 死者 6名
 負傷者 3名

住宅被害 流失 14戸
 全壊 6戸
 半壊 38戸
 床上浸水 1,589戸
 床下浸水 1,482戸
 非住家の被害 81戸

農作物等被害 水稲浸水 3,280ha
 雑穀浸水 1,141.9ha

農地農舎被害 水田浸水 381.8ha
 雑穀浸水 352.1ha

土木施設被害 堤防決壊 91所・288m
 道路浸水 26所・207m
 灌漑施設 89所・808m
 橋梁被害 25所・1141m
 総延長 23km・128m

林業関係被害 木材流失 14,020石
 林道の被害 2,980m

矢巾町

旧堤防欠壊 240メートル(高徳田)
 (0メートル(高田))

家屋半壊 20戸
 耕地埋没 3町
 耕地流出 3町2反
 損害額 7,600万円

奥州市 (磐梯村)

浸水家屋 床上337戸、床下54戸

流失家屋 2戸
 流出非住家 41戸
 半壊家屋 2戸
 半壊非住屋 8戸

一関市

死者 100名
 行方不明者 -
 負傷者 21,725名
 流失家屋 121戸
 全壊家屋 200戸
 半壊家屋 719戸
 床上浸水 3,234戸
 床下浸水 21戸
 田畑の冠水 1,218ha
 田畑の流出 218ha



現・磐井町、桜木町。水が引かないまま流木が屋根の高さに集まっている(一賀市)



まだ幼い少女達にも容赦なく天災はやってくる(一賀市)



僅人の方だけでは、この瓦礫の山を動かすことは出来なかつたろう(一賀市)



一賀駅構内から総務が伴ひる五十人町三賀方面、かたづけを始めた人々(一賀市・カスリン)



水が引いてきた一賀駅前通(一賀市)



平成29年8月撮影



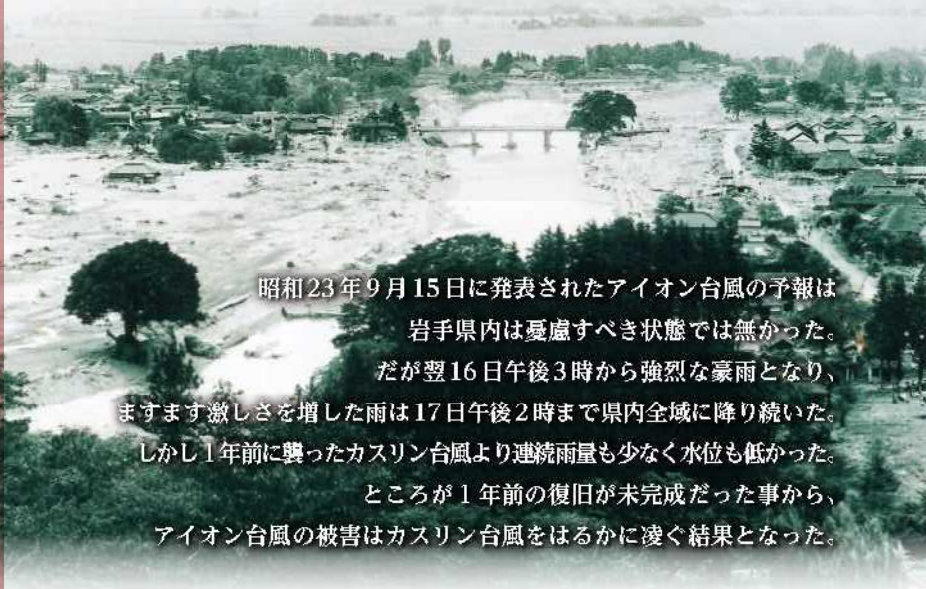
磐井川の上の橋はかるうじて落橋を免れた(一賀市)



平成29年8月撮影



アイオン台風70年豪雨の記録



昭和23年9月15日に発表されたアイオン台風の予報は、岩手県内は憂慮すべき状態では無かった。だが翌16日午後3時から強烈な豪雨となり、ますます激しさを増した雨は17日午後2時まで県内全域に降り続いた。しかし1年前に襲ったカスリン台風より連続雨量も少なく水位も低かった。ところが1年前の復旧が未完成だった事から、アイオン台風の被害はカスリン台風をはるかに凌ぐ結果となった。

気象状況

マリアナ東方海上から進んできた台風は15日に低気圧を吸収し、16日3時には紀伊半島南方100km海上に達した。台風の東側の暖気は気圧の谷に急激に流入し、16日15時には強力な寒気に阻まれたうえ、奥羽・北上両山脈の地形的な影響もあり、北は岩手県南部、西は宮城県中部に温暖前線を進めたまま停滞。このため岩手から宮城にかけての帯状の狭い範囲が豪雨エリアとなった。



アイオン台風による被害

被害項目		被害
人的被害		1,203人
内訳	死者	393人
	行方不明者	316人
	負傷者	494人
住家被害		33,646戸
内訳	流失	1,343戸
	焼失	15戸
	全壊	1,053戸
	半壊	1,304戸
	床上浸水	15,774戸
床上浸水		14,157戸
非住家被害		10,219棟
被害額計*		約128億円

*このデータは、北上川流域市町村の推定値です。

降雨状況

狭い範囲での集中豪雨であり、県内では獺ヶ石川と磐井川が大洪水となった。15日は多い所で90mm、少ない所では20mm未満だったが、16日は停滞した温暖前線によって、千厩159.7mm、石淵284.8mm、水沢275.2mmの激しい豪雨となった。

その後、17日は各地で雨が上がり出していた。反対に一関では、15日が7mm、16日が150.6mm、17日には245.6mmと特異な降雨となり、総雨量的にも記録的な豪雨であった。

(※地名は雨量観測所の名称)

出水状況

豪雨の範囲はカスリン台風より狭かったが、アイオン台風は岩手県南部から宮城県中部にかけて帯状の記録的豪雨地帯ができた。

一関の狐禅寺は16日まで間に水位がすでに5mを超えていたが、18時から20時までに1時間あたり2mずつ4mも急上昇している。これは土石流などにより磐井川がせき止められ、急激な出水となったためである。これにより再び一関が水害に襲われ前回以上の被害を出している。(※地名は雨量観測所の名称)



残ったものは残骸とにこり水(一関市)

昭和23年9月洪水氾濫図

- 浸水面積 35,011ha
- 氾濫原因 破堤、決壊、越水
- 決壊ヶ数 1,356ヶ所
- 浸水家屋 18,232戸

▲主要水位観測所 ▲ダム(仮設)
○雨量観測所 ■洪水区域 〓河川
河川総延長 昭和23年4月より

北上市 (租買郡内)

人的被害	死者	5名
	負傷者	3名
	行方不明	1名
住家被害	流失	15戸
	床上浸水	505戸
	床下浸水	703戸
農作物被害	水稲被害面積	1,541.4ha

奥州市 (楯株村)

浸水家屋	床上	159戸
	床下	103戸
住家全壊	2戸・非住家全壊	5戸
住家半壊	2戸・非住家半壊	7戸
住家流出		1戸
耕地流出		26町1反
冠水		43町
堤防決壊		8ヶ所 (645段)



矢巾町

旧堤防決壊	261メートル(高田)
	70メートル(高田)
浸水家屋	60戸
耕地埋没	17町
耕地流出	5町
耕地冠水	32町
被害額	8010万円

一関市

死者	234名
行方不明	239人
罹災者	19,349人
流出家屋	468戸
全壊家屋	334戸
半壊家屋	501戸
床上浸水	1,637戸
床下浸水	334戸
田畑の冠水	1,060ha
田畑の流出	250ha



ドラム缶や家塵が漂着した地主町(一賀市)



D51 機関車が覆輪。左には鉄路まで破れてきた家(一賀市)



湯流の後は独特の臭いがあった(一賀市)



水に沈んだ家(一賀市)



減水した後は高嶺の山が現われる(一賀市)



大町の通りは壊れてきた家でおさがった(一賀市)



火攻め水攻めとなった幕々しい災害後(一賀市)



北上川の洪水の歴史

北上川は古い時代から氾濫を繰り返した記録がある。それは不作や飢饉など、住民の生活苦と直結していた。

平安時代の主な洪水の記録

- 弘仁元年(810年頃)「当時陸奥開拓を行っていた紫波城への兵糧輸送が憂慮される」等、洪水を示唆するような記述がされている。([日本後紀])
- 康平五年(1062年)「衣川右岸の洪水のため、朝廷軍の源義家が東北地方の豪族・安倍氏を攻撃できなかった」と記録が残っている。([陸奥話記])

鎌倉時代の主な洪水の記録

- 宝治元年(1247年)に起こった洪水は白鬚洪水(しらひげみず)と呼ばれ、花巻地区に未曾有の被害をもたらした。([奥々風土記])

江戸時代の主な洪水の記録

- 北上川上流部に158回を数える洪水の記録が残る。([北上川百年史])

明治時代の主な洪水の記録

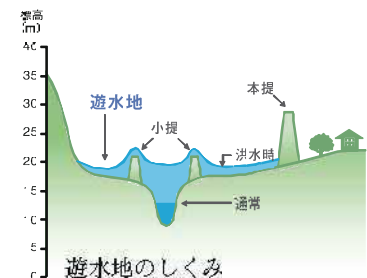
- 明治8年(1875年)大洪水。([登米郡史])
- 明治22年(1889年)大洪水。([登米年記])
- 明治31年(1898年)大洪水。
- 明治43年(1910年)9月の大洪水。前線を伴って岩手県全域に豪雨をもたらし、雨域の中心は県北西部であった。この洪水が直轄事業の契機となり、北上川水系の改修工事において、本格的な河川改修計画が策定された。



北上川の洪水対策①【遊水地】

北上川の洪水を防ぐために国は二つの大きな事業を行っている。一つは昭和55年から始まった一関遊水地事業である。これは大洪水の時に水が押し寄せないように、一関市街を守るため整備されたものである。

遊水地は北上川そばの小堤と外側の大きな周囲堤の二段構えになっており、小堤と周囲堤の間は普段は稲作や野菜作りに利用されている。小さな洪水は小堤で水を防ぐが、小堤でも防げない大洪水の場合は、あふれた水を田畑の部分に貯めることで北上川本川の水位上昇を低減させる。またその場合でも周囲堤が一関市街地を守る仕組みとなっている。一関遊水地は三つの遊水地で構成されており、最も広い第一遊水地は820haの広大な面積になっている。



	広さ	設置	
第1遊水地	820ha	築堤	延長28,200m
第2遊水地	470ha	水門	3カ所
第3遊水地	160ha	小堤	延長18,200m
合計	1,450ha	管理用道路	延長14,900m



一関遊水地(平成14年7月 台風第6号)



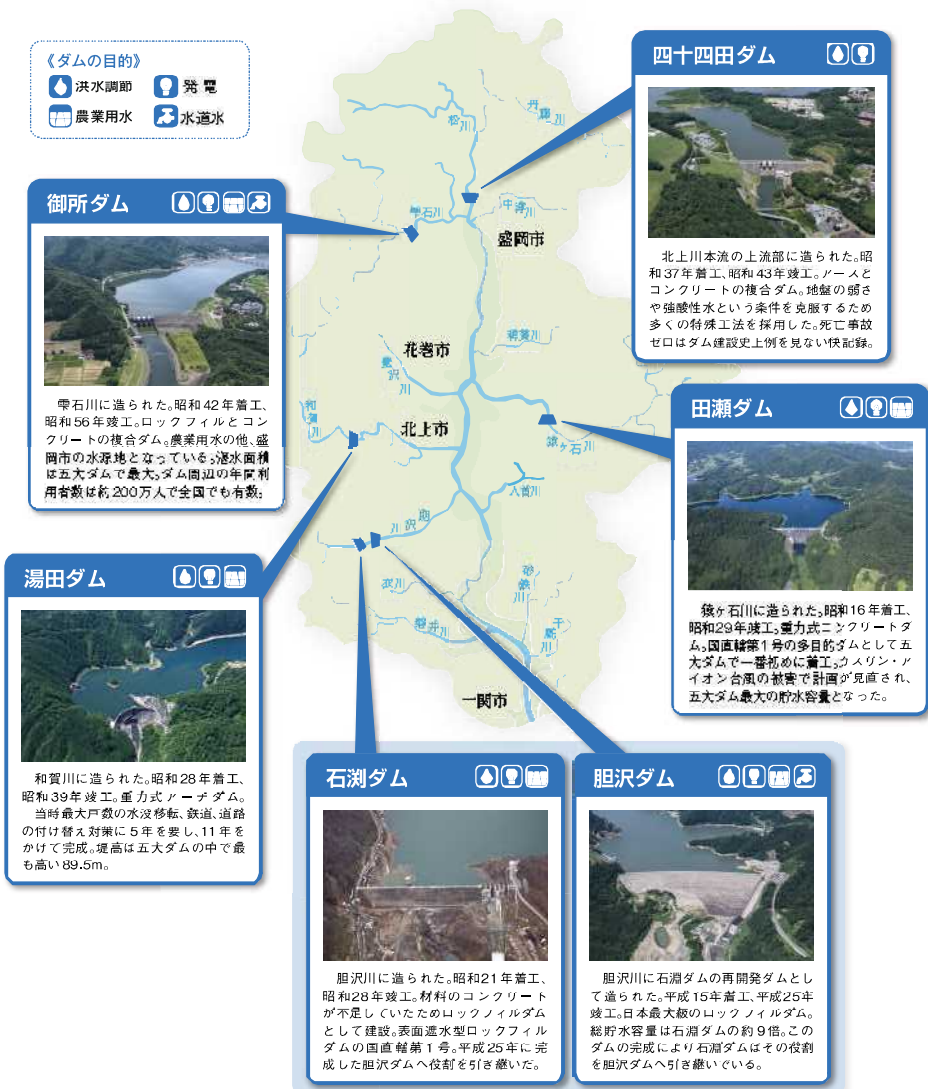
一関遊水地(平成19年9月洪水)

北上川の洪水対策②【ダム】

北上川の洪水対策のもう一つは、「北上川特定地域総合開発計画(KVA)」と名付けられた北上川上流とその支流に五つのダム群を建設する事業である。石淵(後に再開発で胆沢ダムに)、田瀬、湯田、御所、四十四田の五つのダムは北上川五大ダムと呼ばれている。

名称	所在河川	ダムの場所	完成年度	堤高	堤頂高
石淵ダム	胆沢川	奥州市胆沢	昭和23	53m	34.5m
※胆沢ダム	胆沢川	奥州市胆沢	平成25	132m	72.3m
田瀬ダム	猿ヶ石川	花巻市東和町	昭和29	81m	32.0m
湯田ダム	和賀川	和賀郡西和賀町	昭和39	89.5m	26.5m
四十四田ダム	北上川	盛岡市下扇川	昭和43	50m	48.0m
御所ダム	聖石川	盛岡市紫	昭和56	52.5m	32.7m

※石淵ダムの再開発ダム



カスリン・アイオン台風70年 水防災フォーラム

開催目的

一関市周辺地区はカスリン台風、アイオン台風と2年続けて100名を超える死者を数える壊滅的な被害を受けました。平成29年度はカスリン台風から70年の節目にあり、本フォーラムを機会にこれまでの水害を振り返り、これからの防災について住民一人ひとりがしっかり認識し、胸に刻んでもらうことを目的に開催しました。

主なプログラム

- **アトラクション**
舞川獅子躍、一関市消防団纏組
- **作文発表会、アイオン台風体験談**
平成28年度「土砂災害防止に関する作文」入賞作品発表会
アイオン台風体験「生きる」
- **「北上川」記録映像放映**
- **基調講演**
「カスリン・アイオン台風70年に思う」
「増え続ける台風・大雨災害と最新の防災情報について」～自分の命は自分で守る！～
- **パネルディスカッション**
「水防災意識社会」の再構築を考える

【日時】平成29年9月9日(土)
 【場所】一関文化センター
 【共催】一関市、岩手県、一関商工会議所、北上川「流域圏」フォーラム実行委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 【協賛】(一社)東北地域づくり協会
 【後援】岩手日日新聞社、岩手日報社、ICN一関ケーブルネットワーク、一関コミュニティFM(株)



70年事業チラシ



70 同に備もろ
「水防災意識社会」の再構築を考える

平山> カスリン・アイオン台風により一関・平泉地区は甚大な被害を受け、それから70年経過して時代も変わった。春先はダム放流に詰めかけたダムマニアの歓声が響き、一関遊水地の高い堤防はそこに有るのが当然の原風景だと感じている世代が増えている。忘れてはいけない汗と涙の努力、そして犠牲的な精神で復興に



取り組んで来られた先人達の姿が徐々に風化していくのは、地域の歴史にとって大きな損失と感じる。
本パネルディスカッションは、カスリン・アイオンの惨禍、復興、そして現在に至るまでの地域の努力を辿りながら、地域の安全について考える機会にしたい。
辻山> 私は昭和22年9月15日、この文化センター隣の家屋の2階で生まれた。まさにカスリン台風襲来の日であり、そのとき1階は洪水で水没していたと母親から聞いている。その私が70年を迎える事が出来たのは様々なご支援とご協力であると本当に感謝をしている。当時、亡くなられた方もいたが、その分の恩返し

が出来ればと考えている。
当時、第二次世界大戦の後の社会経済の衰退などで、住民が自信を無くしていた時代に、立て続けにカスリン・アイオン台風が来て建物の流失や全壊など未曾有の被害をもたらした。しかし「一関市復興物語」には、行政や住民を問わず国や県のバックアップを受けながら皆で復興・復旧に取り組んだという記録がある。現在の一関市の発展は、復興・復旧に携わった方々の想像を絶するような苦勞によるものと思っており、心から感謝と敬意の念を抱いている。同時に、いかにして次世代への語り継ぎと、水防災意識の高揚を図るかが、水害を経験した事のない我々若者にとっての責任であると痛感している。

パネルディスカッション・出演者



コーディネーター
平山 健一 氏
《岩手大学 名誉教授》
元岩手大学学長



パネラー
佐藤 暁偉 氏
一関商工会議所会頭



パネラー
辻山 慶治 氏
中里まちづくり協議会
会長



パネラー
大隅 智子 氏
気象予報士・防災士



パネラー
八重樫 弘明 氏
岩手県土整備部
河川港湾担当技監



パネラー
清水 晃 氏
国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所長



一関市はカスリン・アイオン台風後から市を挙げて水防訓練を続けている。同じような被害を防ぐための決意の機会と捉えて実施していた事もあり、当時は皆で助け合い、地域全体のコミュニケーションが強かった。現在は水害が減少した事に伴って地域のコミュニティの希薄さを感じられるようになった。コミュニティの再構築が最優先課題であると考えている。そのための事業として、我々の協議会では平成27年度から中里まちづくりの計画「人が輝き、地域が輝くまちづくり」を基本理念とし、地域の3つの自主防災組織と小学校児童の皆さんに参加頂き、地域全体の防災訓練を実施している。小学生児童には避難訓練により災害を肌で感じてもらい、併せて子ど

も目線での防災マップづくりによって防災意識を養っている。
佐藤> 私はカスリン台風襲来時は幼稚園児で、気が付いた時には親から2階に避難させられていた。あふれた水が一度引いた際は、流出した家具等を両親が拾い集めに行き、真っ暗な中で細かく泣いていた。その後また増水したため、2階に閉じ込められたまま近所の人達と2日間一緒に生活した記憶がある。
アイオン台風の時はちょうど夕食時で、炉を囲んで家族と食事の中に、突然炉の真ん中から噴水のように水が吹き上がった。カスリン台風の記憶も鮮明だった事もあり、すぐに洪水だと悟った父親に「2階に逃げろ！」と叫ばれ、私が妹の手を引いて2階に避難した。その時にはもう1階の床が浸水していた。そのとき窓の外では、屋根の上に避難した人が家ごと流されながら「助けてくれ！」と叫んでいるのを見た覚えがある。
水害で印象的だった事の一つは水害後の泥の多さで、50～60cm積もっていた。もう一つは流木の多さ。流れてきた流木は、磐井川に面した蔵の中に大人

の背丈より高く詰まっており、その流木を薪として小学校1年生当時から中学生まで使用した記憶がある。
ただし学校の復旧は随分早かった。道路を埋め尽くした流木を乗り越えて学校に通った。ボランティア等が無かった当時、一関市内の両親世代は相当な苦勞をして復興したのだと思う。そして改めて思い出すのは、当時、支援で配給されたおにぎりの美味しさ。ごま塩をまぶしただけのおにぎり。それが美味しい。食料というものの大事さを感じた。
カスリン・アイオン台風後は、台風の接近する予報が発表されると、重要な家具等を2階に運び、持ち運べない物は柱に縄で結わえ付ける等の対策をしていた。
やはりそれだけ恐怖心があったということ。しかし年月と共にそういう思いは薄れていき、堤防が大きくなるにつれ、もう来ないだろうと感じるようになった。しかし堤防のおかげでこれまで水害を防いで来たが、水位がかなり上昇する事も多く、現在の堤防でも油断は出来ないと考えている。



大隅 自然と共に生きていくために、最近の大雨にも備える必要に迫られている。豊かな恵みを与えてくれる一方、豪雨で川の様子が急変する事が多くなっている。その背景の一つに地球温暖化が関係していると考えられている。東北地方の平均気温はこの100年で1.2度上昇、世界の平均気温だとおよそ0.8度上昇しており、世界規模で地球温暖化が進行している。地球の平均気温が上昇すると空気中の水蒸気が多くなるという特徴があり、そのため降雨の際は雨の量が多くなる傾向がある。また地球温暖化によって海水温度も上昇している関係から水蒸気量が多くなり、予想以上の雨が降る事も分かってきた。

特にこの1年は、記録的短時間大雨情報と呼ばれる数年に一度程度しか発生しないような大雨の情報を、ニュースで何度も聞いている。1時間80～100ミリ程度の猛烈な雨がどこでも降っている事になる。東北地方でも増加傾向にあるとデータにも表れており、過去10年とそれ以前の10年を比較した場合、1時間50ミリ以上の雨の回数は

2倍程度に増加している。これからは更なる気温の上昇が予想されており、豪雨の回数や猛暑の日数は増えると思われる。

また台風は右側の風が強く、カスリン・アイオン台風のように、直撃せず岩手県の南方を通過する場合でも、湿った南風が奥羽山脈に当たる事によって大雨になるケースがある。今後、台風が増加・巨大化し勢力を保ったまま接近すれば、岩泉町で降った規模の豪雨が一関市に降る事もあり得る。

今後は地球温暖化も含めた防災への対策が更に必要となる。

つまりこれまでの常識が通用しない時代になっており、少年時代から豪雨の恐ろしさを防災教育を通して学習することが大事。

清水 北上川全体ではまだ治水事業は完成しておらず、堤防の未整備箇所もあり、整備途上といった状況。施設の整備は促進していくが、ハード対策だけでは限界があり、被害を減少させるためには早期避難等のソフト対策が重要である。またそうしたソフト対策の実効性を高めるには、我々行政の取組と併せて住民の皆さんの危機管理意識の向上が重要だと思っている。

八重樫 アイオン台風は宮古市でも被害をもたらしており、藤原地区で死者89名、住宅5,570棟が損壊した事も紹介させて頂きたい。

県管理の治水対策の状況は、

河川整備率でみると48.8%に達し、ハード面としては着実に進捗しているが、それだけでは多様な被害を防げない事は昨今の被害状況が物語っている。

そのため関係機関と水防団体が水防計画に基づいて、重要水防箇所の確認と共有を行うなどソフト対策を講じているところである。



平山 これまで北上川における様々な事業には、危険な工事に殉じた技術者や移転をされた方など多数の献身的な人々の想いの上に有る事を我々は忘れてはならない。しかも近年頻発している想定外の水害をもたらす大自然の力から大切な命と財産を守っていくためには、更にレベルアップした治水計画、そして総合的な水害対策が必要になったと強く感じる。

清水 近年では河川改修の効果により洪水の発生頻度が減少した事から、人の意識が水の災害は施設によって防ぐものへと変化した。一方で雨の降り方が局地的化、集中化、激甚化し施設では



防げない洪水の発生頻度が高まっており、我々の意識と自然現象との間に齟齬が生じてしまった。我々全員がダムや堤防等の能力に限界がある事、また施設の能力を超える大洪水は必ず発生するものと、意識を変化させる事が被害を最小限にするために必要であり、それが「水防災意識社会の再構築」である。

国土交通省、岩手県、盛岡地方気象台及び北上川上流関係15市町で設立した協議会では、安全な避難行動、地域防災力の維持・向上、水防・排水活動の着実な実施のため、エリアメール・水位情報の発信、住民参加型の避難訓練、要配慮者避難確保計画、防災教育等を推進していく。

辻山 危惧しているのは住民の防災意識の希薄さ。水防災に限らず地域の防災のために住民一人ひとりが出来る事を具体的に言う事が大切。それが地域での自助・共助の原点であり、ひいては地域コミュニティも強固な物となる。

我々の地区の防災マップには災害時要配慮者宅を図示し、行政区長や民政児童委員等が安否

確認するための補助資料も作成している。このようなソフト面は、私達住民が担当すべきものと認識している。

カスリン・アイオン台風から70年、復旧復興に携わった多数のご尽力により私達の今の生活がある。その事を肝に銘じ、次の世代へ安心な一関を引き継ぐために微力ながら活動していく。

佐藤 個人の防災意識を高めるには、防災組織で行っている活動と取組み・仕組みを理解してもらう必要がある。例えば水害の危険性とその対策をラジオでシリーズ発信する等で防災意識が浸透していくのではないかと。ボランティアで小学校の水害授業を行なうと、これまでの災害事例を過去の事象として捉えられてしまい、災害に備えようという発想にならない。子供たちにこそ水害の体験談や映像による防災教育が必要と感じる。

また、災害への備えとして、被災後の活動を構築する必要があると思っている。当会議所も遊休機械を集め無償で提供するボランティア活動のためのネットワークを強化したい。



平山 災害は必ず、どこかで、いつか起きるものであり、予測が出来ない自然や気象状況に備える新たな方法と考え方が提案された。しかしこれは、一人ひとりが自然に対して畏敬の念を持ち自然と向き合い暮らすという、我々が元来持っている本性ともいえる。今回のディスカッションは、岩手県には絆のコミュニティがあると再認識する一歩になった。予測できないものに悲観的にならず、これまでやってきたように堂々と胸を張って行動すれば、社会は当然我々のものになると強く感じた。



アトラクション



舞川鹿子踊



一関市消防団権組



「土砂災害防止に関する作文」入賞作品発表会



県立一関第一高等学校附属中学校

アイオン台風体験「生きる」紙芝居と体験談



千葉貞子さん

基調講演



講師 / 高崎哲郎氏



講師 / 大隅智子氏

展示



一関今昔写真展



パネル展



わんこぎょうだい

あいぽーとフェア



洪水時には、ダムの洪水調節、地元水防団の活動、排水ポンプ車の排水作業などにより被害の軽減に努めています。しかし大規模な水害が発生した場合に、被害を最小限にするためには地域住民の力が必要となります。

そこで、風水害や防災・減災について、自分で・家族で・地域で考えるきっかけづくりの場として「あいぽーとフェア」を開催しました。フェアでは豪雨体験の他、治水施設や災害対策車両・機器の役割、防災情報など、「命を守る防災」について学びました。



降雨体験

- あいぽーとフェア17～しっかり備えて、ばっちり避難する～
平成29年11月18日(土) 【北上川学習交流館あいぽーと】
- あいぽーとフェア18～みんなで学んで、みんなで備える～
平成30年11月3日(土) 【北上川学習交流館あいぽーと】



ドローン飛行実演



災害対策車両展示



沓木アート

カスリン・アイオン台風水害と 治水対策のあゆみパネル展



●平成29年～30年
[北上川学習交流館あいぽーと ほか]

カスリン・アイオン台風の水害と、それを契機として進めてきた河川事業についてパネルを使って紹介しました。水害を風化させず語り継ぎ、次世代の防災意識の高揚を目的としています。パネル展は、あいぽーとの他、関連イベントや市役所、防災教育の場でも展示しました。



防災教育と出前講座による 水害リスクの理解と防災への備え方



●平成29年～30年
[手代森地区福祉センター ほか]

各市町村の団体や学校からの依頼に基づいた防災等の講話と小学校への防災教育の支援も行いました。浸水エリアや防災マップを使った説明、避難の方法と注意事項について説明しました。さらに近年の気候や水害事例から、災害は身近に起こりうる可能性がある事も説明しています。



ゲリラ豪雨展



●平成29年6月29日(木)～8月16日(水)
[北上川学習交流館あいぽーと ほか]

近年、耳にする機会が増えた「ゲリラ豪雨」。その発生から取束の仕組み。その影響で起こる水害から身を守るポイントを、イラストや映像(CG)で分かりやすく説明しました。子どもでも理解しやすい内容から、小学校の団体が多数訪れました。会場ではカスリン台風被害のパネル展示も行いました。



一関遊水地見学会



●平成29年12月9日(土)、平成30年9月29日(土)
[一関遊水地内工事現場、北上川学習交流館あいぽーと]

一関遊水地とその周辺は水害多発地帯でしたが、治水対策の推進によって洪水被害を軽減させてきました。見学会では、その事業の進捗状況や災害対策車両を見学し、治水施設の役割と防災への理解を深めました。参加者からは「異常気象による災害が頻発しており、水門を早く完成させて欲しい」等の声がありました。



胸に刻もう

カスリン・アイオン台風70年
～風化させない歴史とつなげる未来～

カスリン・アイオン台風70年 事業報告書

国土交通省 東北地方整備局 岩手河川国道事務所

【発行日】2019年3月

* 貴重な写真の掲載に関しましては、古い時分のことから、持ち主のみなさまにご連絡を取れないものも多く、写真の出典につきましては省略いたしました。